

## 10年間無症候に経過した高令者巨大肺内腫瘍の1例について

丸の内病院

長谷田 祐作, 他2名

富山医科薬科大学第1外科

宮本 直樹, 杉山 茂樹, 山本 恵一

### はじめに

私達は農村地域出身高令女性で胸部X線所見上, 肺野に巨大な腫瘍像を呈し, 約10年間ほぼ無症候の状態に推移した患者を経験したので会員諸兄に紹介, 参考に供すると共に御批判を得たいと存じます。

昭和55年11月入院時の胸部X線撮影では第1図に示されるように右横隔膜麻痺挙上と共に同肺野の上半分を占める巨大な mass がみられ第2図側面像により後縦隔腫瘍であることが認められます。

### 症例と経過の概要 (表1参照)

H. N. 石川県動橋町(農村地域)出身。初診時77才の女性で脳血管傷害などのため金沢市丸の内病院へ入院, 当時より嚥下障害, 上下肢の麻痺など認められませんでした, Performance Status はかなり低下しておりました。

現症としては体形, 骨格小で貧血と血清膠質反応の軽度上昇を認めるほか異常はみられませんでした。

第1図 胸部X線平面図 (昭和55年11月入院時)



表1 症例経過概要

H. N. 初診時77歳, 女性,	終診(死亡)時 87歳
家族歴: 著患なし	
既往歴(併存疾患): 脳血管傷害	
主 訴: 歩行障害(併存疾患による)	
現病歴: 1980年11月(77歳)入院時より大き右肺野のほぼ1/2を占める円形の後縦隔腫瘍をみとめ, 経皮生検で神経線維腫であった。以後稀に気管支炎を併発することがあったが, ほぼ無症候に10年を経過し, 心不全にて死亡した。	
現 症: 体型骨格小	
中等度貧血, 軽度肝能障害(膠質反応)のほか中等度発熱を反復, その他特記すべきことなし。胸部X線所見を供示する。	

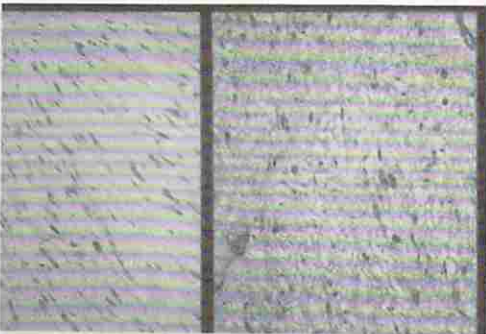
第2図 胸部X線写真(側面像)



第3図 胸部X線写真(断層 5cm及び6cm像)



第4図 生検組織所見図



第5図 胸部X線平面図(死亡約1週前)



次の断層像第3図で、腫瘍は類円形、境界明瞭、内部構造は均等、石灰沈着や化骨像は認められません。

経皮生検による組織所見は第4図に見られる如く一部粘液変性を伴う線維性腫瘍で良性の neurofibroma の所見に合致しております。

以上により患者はかなり高令ではあるが、外科治療の適応と認め、そのことを説明、勧奨致しましたが、患者及び家族の承諾が得られぬまま保存的対処を続けておりました。

この間およそ3か月間隔で胸部撮影を行なって腫瘍の大きさの変化や合併症発生の有無を監視しておりましたが、病巣による肺組織圧迫などに基く二次的肺感染や、気道への穿破などを生じないよう喀痰溶解剤、ネブライザー吸入療法などの適用と共に、軽熱などを見た時には予防的化学療法をも加えております。

このようにして10年間、ほぼ問題なく推移して参りましたが、昨年(平成元年)11月22日、心不全を發し死亡致しました。

死亡の2週間前頃に37℃台の発熱があり、対症療法で一旦解熱しましたが、1週間後再発熱を認め、胸部X線撮影では肺野に目立った所見は認められなかったものの気管支肺炎の合併を疑って居たわけであります。

表2は大阪大学及び京都大学を中心に行われた過去25年間のわが国縦隔腫瘍の外科系全国集計10,127例の一覧であります。

これらの中、神経原性縦隔腫瘍は12.7% 1,285例を占めて居り、組織分類では神経鞘腫が約半数を占めますが本例のような neurofibroma は18.9%であります。

表3は神経原性縦隔腫瘍の良、悪性別に治療対処がどのように行われたかを調査したもので良性1,063例中986例、92.8%に手術が行われ、手術されなかった77例(7.2%)については表4に示されて居る如く5年以内死亡4例中2例が二次的肺感染症によると記載され

表2 縦隔腫瘍全国集計症例 1961~1985  
(正岡, 寺松)

組織型	症例数 (%)
胸腺腫	5,583 (55.1)
神経原性腫瘍*	1,285 (12.7)
奇形腫	1,277 (12.6)
リンパ性腫瘍	652 (6.4)
先天性嚢腫	513 (5.1)
縦隔甲状腺腫	185 (1.8)
その他	632 (6.2)
計	10,127 (100.0)

\* 神経原性腫瘍 1,285例の内訳

組織分類	症例数 (%)
神経鞘腫 (良性・悪性)	581 (45.2)
神経線維腫	243 (18.9)
神経節細胞腫	288 (22.4)
神経芽細胞腫	125 (9.7)
その他	48 (3.7)
計	1,285 (100.0)

表3 神経原性縦隔腫瘍の対処

	組織分類	対処	
		摘出	観察 (保存的治療)
良性 1,063例	神経鞘腫	986例	77例
	神経線維腫	(92.8%)	(7.2%)
	神経節細胞腫		
悪性 174例	悪性神経鞘腫	145例	29例
	神経芽細胞腫*	(83.3%)	(16.7%)

表4 良性神経原性縦隔腫瘍の予後 (寺松集計)

1,063例中予後の判明した975例について

摘出例	生存率	5年	96.7%	10年	91.3%
	死亡例	術死	2例 (0.21%)	不明	1例 (0.1%)
観察例	生存率	~5年	94.8%		
	死亡例	4例	死因 肺炎	2	心不全 1

て居ります。

なお集計例中、本例のように10年間以上追跡されたものは、ほかに1例のみでありました。

以上、まとめとして、本例は比較的寡い良性巨大神経線維腫の10年間長期観察例であります。一般概念から述べるなら外科的に摘出し肺組織への occupying space からの解放によって二次的肺感染を起さないようにすることが望ましいと考えられます。

### おわりに

はじめに述べたように私達は農村地域出身の高令女性で、肺野に巨大な腫瘍像を呈しながら約10年間ほぼ無症候の状態で推移した患者を経験、比較的珍しい例として平成2年2月第146回日本内科学会北陸地方会において報告致しましたが、一部字句など修正の上、本研究会にも紹介、投稿したものであり会員諸兄より何かと御批判を頂ければ幸甚と存じます。